



奈良山岳会90周年記念事業

大峯奥駆七十五靡を拝する全山縦走の記録

昭和八年の会創立以来九十年の歴史を重ねる当会は、大峰・大台山系のパイオニアとして先人から歴史を重ねてきた。九十年の節目に当たる本年のゴールデンウィークに記念事業として大峯奥駆全山縦走を企画した。この中で現在の奥駆道で出会える靡を調査することを主眼として記録を残した。会員は各靡で畏敬の念を持って拝し、奈良、平安時代から信仰の続く聖なる修験の山への思いを深めた。なお、奥駆は吉野から熊野への逆峰で行い、釈迦ヶ岳でサポート隊の支援を受けた。

期日：2023年4月29日～5月5日

参加者：

全縦走：西山哲也、松本豊美

阿弥陀森～本宮大社：宮本由幾

吉野柳の渡し～釈迦が岳：津村昌明

釈迦ヶ岳～本宮大社：田部公子、元島寿美雄、鐵さおり、米村由紀子

玉置山～本宮大社：森川光明、小泉直子

サポート隊：石田達也、宮西節子、太田晃司、堀川順子、伊藤美奈子、米原三環子、有村富美子、清岡幸司、柳川靖夫

大峯奥駆道で拝することのできる靡一覧

日程	靡（逆峰順）		備考	
	番号	名		
第一日目	75	柳の宿	柳の渡し、美吉野橋を渡る（六田の宿）	
	74	丈六山	吉野神宮のある広い台地、吉野神宮	
	73	吉野山	金峯山寺蔵王堂	
	72	水分神社	水分神社、正面鳥居の直ぐ脇に役行者像	
	71	金峯神社	金精明神	
	70	愛染の宿	奥の院から青根ヶ峰への途中	
	69	二蔵宿	百丁茶屋跡 立派なお堂	
	68	浄心門	名前は見当たらず、洞辻茶屋のすぐ外に迫力のある不動尊	
	第二日目	67	山上ヶ岳	金峯山寺
66		小篠の宿	行者堂に不動明王、聖宝座像が残る	
65		阿弥陀森	結界には何もない	
64		脇の宿	広場中央のモミの木の根元に碑伝	
63		普賢岳	小普賢の山頂、岩にたくさんの碑伝	
61		弥勒岳	碑伝は見あたらない	
60		稚児泊	苔むした平坦地、稚児泊と書かれたブリキ板、石と碑伝	
59		七曜岳	山頂に手彫り木製の仏像とたくさんの碑伝が岩の傍らに	
58		行者還り	金剛蔵王の石碑が祀られ碑伝がおかれている	
57		一の多和	池のほとりに錫杖が立てられてあり根元に碑伝	
56		石休宿	いしやすばの宿跡の標石がある。木の根を噛む小さな岩	
55		講婆世宿	講婆世僧正の墓所。理源大師聖宝像が設置	
第三日目		54	弥山宿	弥山神社
		52	古今宿	標石がある場所はオオヤマレンゲの保護区内
		51	八経ヶ岳	八経ヶ岳山頂に碑伝
		50	明星ヶ岳	明星ヶ岳山頂
		49	菊の窟	菊の窟遙拝所に多くの碑伝
	48	禅師の森	確認できず。現在は奥駆道は森を外れ森の方向を礼拝する	
	47	五鉢嶺	1694m、崩壊地周辺に碑伝は確認できず	
	46	舟の多和	舟のたわの標石と金剛童子を表す三角形の石あり	
	45	七面山	七面山遙拝所。石標に碑伝	
	44	楊子の宿	宿跡に碑伝	
	43	仏生ヶ岳	仏生ヶ岳遙拝所に多数の碑伝。仏生の分岐よりだいぶ手前 にある	
	42	孔雀岳	1779m 孔雀岳山頂にあり	
	41	空鉢岳	空鉢岳は確認できず	

第四日目	40	釈迦ヶ岳	釈迦ヶ岳山頂にお釈迦様
	39	都津門	標識は登山道にある。靡きは数十メートル南の巨大に出っ張った岩に空いた穴
	38	深仙宿	立派なかん頂堂と内部に役行者、不動明王など祀られる
	37	聖天の森	樹木や岩、経塚大岩の下に碑伝
	36	五角仙	いくつかの巨岩の連なりが笹の中にあり確認できず
	35	大日岳	大日岳山頂の大日如来像
	33	二ツ石	太古の辻（背くらべ石）、前鬼への分岐
	32	蘇莫岳	1530m 木の根元に山名標識のみ
	27	奥森岳	1490m 奥守岳山頂
	26	子守岳	1464m 子守岳（地藏岳）山頂
	25	般若岳	山頂のトラバース道に標識が設置、山頂に碑伝
	24	涅槃岳	1376m 涅槃岳
	23	乾光門	第24靡涅槃岳までにあり拝み返しの宿跡に標識がある
第五日目	22	持経宿	不動明王を祭る
	21	平治宿	行者堂に役行者、金剛蔵王大権現像などが祀られる
	20	怒田宿	怒田宿の跡
第六日目	19	行仙岳	1227m 山頂
	18	笠捨山	1352m 山頂
	17	槍ヶ岳	槍ヶ岳（地藏岳）手前に表示板、石碑と碑伝。巻き道の岩陰に石仏の地藏岳本尊が祀られる
	16	四阿宿	あずまやの宿、宿跡の標石は東屋岳の頂上1230m
	15	菊ヶ池	四阿宿から10分下る。菊ヶ池の石標
	14	拝返し	おがみかえし、菊ヶ池から約20m
	13	香精山	1122m 山頂
	12	古屋宿	如意宝珠岳の手前200mに表示板・石碑・碑伝
	11	如意宝珠	736mの山頂付近に表示板と千眺の森の石碑、碑伝
第七日目	10	玉置山	玉置神社
	9	水呑宿	稜線より往復40分
	8	岸の宿	真新しい標柱、杉の木札に「篠尾辻」の木札と碑伝あり
	7	五大尊岳	825mの山頂に不動明王の台座、碑伝、再建された不動明王あり
	6	金剛多和	広場状の一角に祠があり役行者像が祀られる
	5	大黒岳	574m山頂にま新しい標柱と碑伝
	4	吹越山	ふっこし宿、行者堂に役行者像が祀られる
	1	本宮証誠	本宮大社、熊野川で最後の禊ぎ

碑伝とは 修験道の行者達が、自らの修行の証として山中の行場に収める札で、木の薄い板に墨で名前と年月日や願文を書いたもの

- 参考資料
- 1) 森沢義信『大峯奥駈道 七十五靡』ナカニシヤ出版 2006
 - 2) 森下恵介『吉野と大峰』東方出版 2020
 - 3) 銭谷武平『大峯縁起』東方出版 2008

1日目 4月29日(土)

(天候) 晴れ時々曇り

(コース) 柳の渡し～青根ヶ峰～大天井ヶ岳～洞辻茶屋

(メンバー) 西山・松本(五番関で一旦下山)・津村

(報告者) 津村

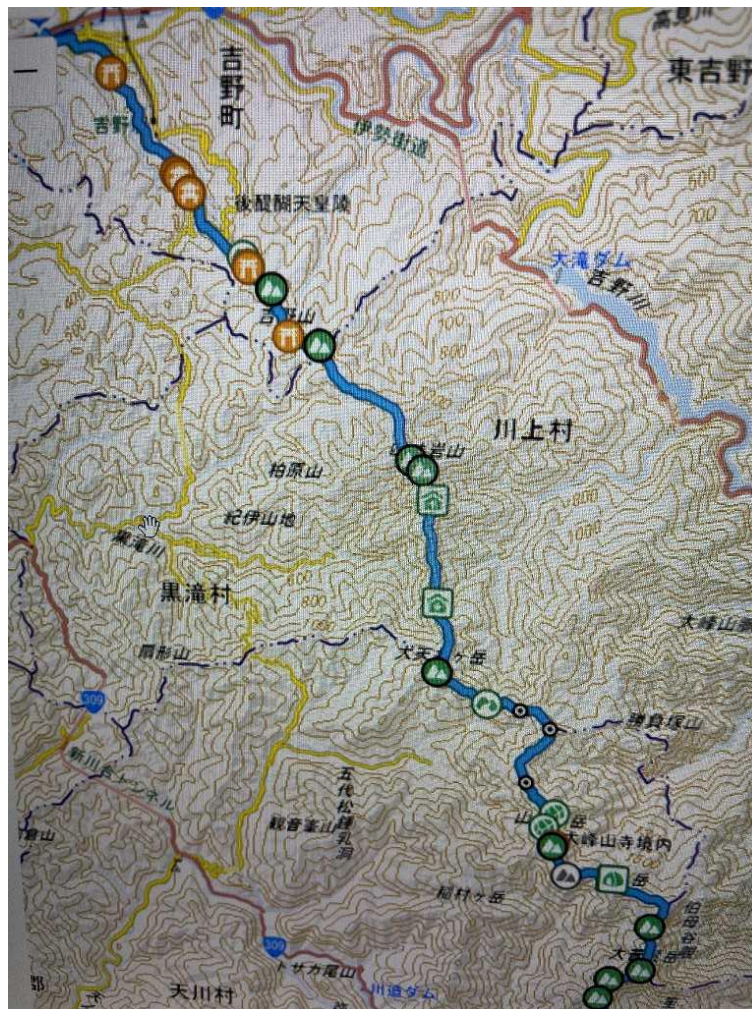
(ルート・時間) 総行動時間 11時間50分(休憩, 靡探し時間等含む)

GPSデータによる 距離 21.8km 累計標高(+) 2170m (-) 840m

柳の渡し(4:00)～丈六山(4:35)～金峯山寺(5:25)～水分神社(6:25)～金峯神社(7:00)

愛染の宿～青根ヶ峰(7:30)～四寸岩山(9:25)～二蔵宿(11:05)～大天井ヶ岳(12:30)～五番関

(13:30)～浄心門・洞辻茶屋(15:40)



スタートの前日、4月29日18時に大和八木ゲストハウス笑顔に西山さんと津村が到着。翌日からの緊張感を感じながら、駅前の中華料理店でトンカツラーメンを食べて腹ごしらえを済ませて20時頃に就寝。

4月29日出発当日、午前2時30分に起床し柳川会長・石田さんの車で柳の渡しまで移動して現地待ち合わせの松本さんと合流した。スタート地点には元島さん・鐵さんもお見送りに来て下さり、暗闇の中をヘッドでスタート。

スタート直後、吉野川（美吉野橋）を渡り終わると初めの靡75番柳の渡し（六田の宿）が新しい案内板とともにすぐに分かった。暗い中であったが石碑がフェンスで囲まれてきれいに整備されており、大切に手入れをされている様子がうかがえた。

吉野の参道の手前は地道の登山道が続き、昔の人々が往来したであろうことを想像しながら歩くと吉野神宮に程なく到着。吉野神宮の敷地は広い台地状になっており、きれいな砂利が敷き詰められた神社の境内になっている。3人で台地状の広場や吉野神宮本殿付近を探したが、靡74丈六山は発見出来ず、恐らく本堂の中に収められているかと思われた。

吉野神宮を出発する頃には日が昇り明るくなってきた。3人で吉野の観光ルートを歩くと、金峯山寺が前方に見えてきた。金峯山寺仁王門は現在のところ保存修理工事が行われ、門全体がシートで覆われていた。門を右側から迂回すると金峯山寺蔵王堂に到着。靡73吉野山は蔵王堂の内部に存在するのか、靡は発見には至らなかった。

更に観光ルートの舗装路を進むと、吉野山全体が見渡せる展望台からの景色を味わいながら上千本を通過して水分神社に到着。靡72水分神社は赤い鳥居の横に祠で囲まれた役行者像があり、その前に存在していた。お花が添えられていて、手入れされていることが分かった。

靡71金峯神社は水分神社から35分で到着、石段の上に神社があり、金精明神を拝んだ。このあたりで観光用の舗装ルートは終わり、最後の人工的(?)なトイレを済ませて地道の登山道に入っていく。今日はお天気が良く空には見上げる限り雲一つない状態で気温も高く3人で汗を拭きながら進んだ。ハイドレーションの水を飲む量も多くなってきた。

金峯神社から約30分歩くと靡70愛染の宿は青根ヶ峰へ登る分岐点の横に石像があり、すぐに発見できた。赤い布を掛けられたお地藏様の足元に碑伝が重ねられていた。横にはこの先に女人結界があることを示す石柱が建っていた。

青根ヶ峰のピーク（標高857m）を越えて心見茶屋跡を通過、だらだらと長い登り坂が続く。見晴らしの良いピークに着くとそこが四寸岩山（標高1235m）で山の上は樹林に囲まれて展望はなかったがほっと一息、少し長い目の休憩をした。

稜線上のアップダウンを繰り返し、足摺茶屋跡でまた休憩。足摺茶屋跡の山小屋の内部には立派な木製の祠があり、驚いた。美しい杉や檜の樹林帯を進むと靡69二蔵宿（百丁茶屋跡）に到着、木製の立派な山小屋である。信徒の方が3名、そこでお祈りを捧げていた。

二蔵宿から進むとすぐに道は急勾配になり、大天井ヶ岳までそこから約1時間半の道のりは登りが続き、とても長く感じた。大天井ヶ岳の登りの途中に小天井茶屋跡があり、上り斜面の横に平らな土地があったので、すぐに茶屋跡と分かった。小さな白い祠もあった。

登りの途中からは今日、歩いてきた稜線が後方にはっきりと見えて3人共歩いてきた道のりの長さ景色の美しさに感動しながら歩き、岩が一部むき出しの長い登りを終えると大天井ヶ岳の頂上に到着。想定していた時間通りにここまでくれば距離の長い1日の行程に少し安心して長い目の休憩を取った。

大天井ヶ岳から下って約1時間、無事に五番関に到着。松本さんとは女人結界門の前でしばしのお別れ、この先は西山さんと津村の二人で進んだ。

空のお天気が急に悪くなり、雨が降り出した。二人ともレインウェアを着て、洞辻茶屋までの道のりはゆっくりとしたペースで進んだ。14時に五番関をスタートして、約1時間半で洞辻茶屋に到着、無人の茶屋が見えた時は今日の長い行程を振り返って二人ともとても喜んだ。到着直後に雨が本降りとなり雨が強くなる直前に小屋に入れた事は幸いだった。

小屋の中には十分に寝られる木製の休憩場所があり、ここに寝袋を出して夜を越すことにした。靡68浄心門の名前は見当たらなかったが、小屋のすぐ外に迫力のある顔立ちの不動尊があり、石柱で囲まれてとても立派な道標であった。



第75 靡 柳の宿 美吉野橋を渡ってすぐ



第74 靡 吉野神宮境内内広い台地で靡は発見できず



第73 靡 金峯山寺蔵王堂



第72 靡 水分神社 正面鳥居すぐ脇に碑伝



第 72 靡 水分神社横の役行者像と碑伝



第 71 靡 金峯神社



第 70 靡 愛染の宿 安禅寺跡



第 69 靡 百丁茶屋跡



第 69 靡 百丁茶屋跡 二蔵宿



第 68 靡 浄心門のあたり



第 68 靡 洞辻茶屋周辺



第 67 靡 山上ヶ岳



第 67 廡 大峰山寺



第 66 廡 小笹の宿

2日目 4月30日(日) 男性(洞辻茶屋～阿弥陀森)

(天候) 曇り時々雨

(コース) 洞辻茶屋～大峯山寺～小笹の宿～阿弥陀森

(メンバー) 西山・津村

(報告者) 津村

(ルート・時間) 摩 68 浄心門 (8:00) ～ 摩 67 山上ヶ岳 (9:00) ～ 摩 66 小笹の宿 (9:50) ～
摩 65 阿弥陀ヶ森 (10:30)

1日目の夜は洞辻茶屋茶店の腰掛の上にシュラフを広げて就寝した。腰掛といっても1畳以上の広さがあり、フラットな木製の床はとても寝心地が良かった。西山さんと私の他に登山者が数名同じ場所で寝ていたのので少し会話を交わした後、午後7時ごろ早い目に就寝した。しかし、寒冷前線通過の影響で一晩中激しい雨と風で洞辻茶屋の中は強風が吹き荒れて小屋ごと吹き飛ばされるのではないかと思うほどの強い風雨で、頻りに目が覚めた。

翌朝起きると風は治まり、しとしとと優しい雨が降っていた。朝食を取ったあと、西山さんと二人でザックカバー・雨具を装着して朝の8時に洞辻茶屋を出発、出発直後は雨が降っていたがその後1時間ほどで雨は止み天気が曇りに変わった。

雨の中、西ノ覗などの修行場や岩の鎖場など足を濡れた路面で滑らさないように二人で慎重に通過して洞辻茶屋を出発後、約1時間で山上ヶ岳の宿坊が見えてきた。

山門(妙覚門)を通過するときは小雨が残っており、周り一面は霧が立ち込め幻想的な雰囲気の中を歩く。晴れた山行は素晴らしいが、山上ヶ岳のような荘厳な場所ではこのような幻想的な天気がとても合っており、二人で修行僧の方々が通った道を思い巡らせながら進んだ。山上ヶ岳の大峯山寺の脇から阿弥陀ヶ森の方向へ登山道を進んで行くと小刻みなアップダウンを繰り返しながら、快調にスピードを上げて歩く。約50分で小笹の宿に到着。

鮮やかな赤い色の山門の横に摩66の場所を確認した。すぐ横の小笹の宿避難小屋には若い男性が一人で泊まっており、話を聞くと足首を捻挫したため山行を中止して、今から下山するとのこと。二人で足の状態をお聞きして心配したが、元気そうだったので挨拶をしてお別れした。避難小屋のすぐ横は溪流になっていて水場としては十分な水量であった。

ここまでのルートで初めての水場だったので、新鮮な水がとても美味しく、今日の行程分の水を補給した。小笹の宿をすぐに出発、女性陣との合流場所である阿弥陀森での集合時間まであと30分に迫っていたので、ここからスピードアップして歩いた。

途中、山の斜面に残雪を発見して大峯山の雪の多さを実感していた。ほとんど高低差の無い稜線上を順調に歩き、待ち合わせ時刻丁度の10時30分に阿弥陀森に到着。女性陣はまだ到着されておらず、西山さんと二人で少し心配しながら待つこと約20分。

遠くからホイッスルの音が聞こえ、西山さんもホイッスルで応答する。その内に遠くに宮本さんと松本さんのカラフルな登山ウェア姿を発見、二人で楽しそうに歩いて来られる姿がどんどんと大きくなってきて、無事に合流することが出来た。

2日目 4月30日(日) 女性(阿弥陀森にて男性と合流)

(天候) 雨のち霧雨混じりの曇り

(コース) 久久能智神社～阿弥陀森～弥山小屋

(メンバー) 西山・津村(阿弥陀森にて合流) 宮本・松本

(報告者) 松本

(ルート・時間) GPSデータによる

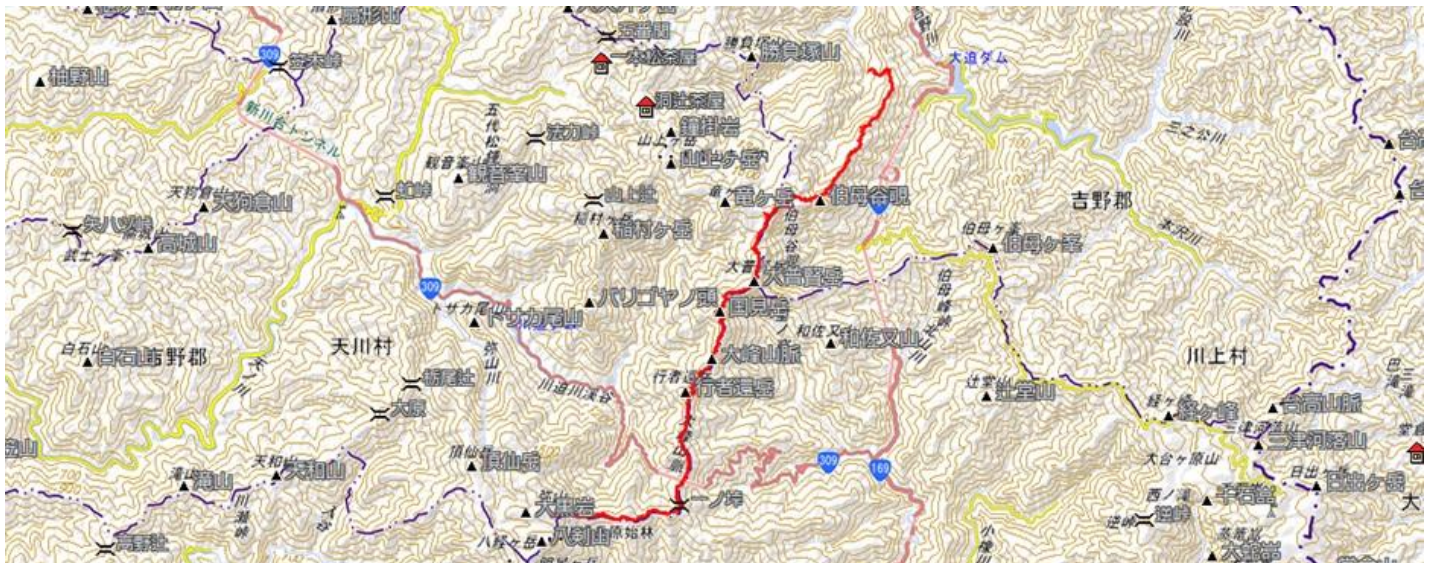
男性: 総行動時間 11時間 45分 距離 17.1km 累計標高 (+) 1592m (-) 1196m

女性: 総行動時間 12時間 35分 距離 20.0km 累計標高 (+) 2689m (-) 1165m

久久能智神社(6:55)～上谷分岐(7:39)～阿弥陀森・分岐(10:55)～経筥石への標識(11:44)～

普賢岳(11:50)～大普賢岳(12:20)～七曜岳(13:57)～行者還小屋(15:20)～一の多和(16:42)

～石休宿(17:31)～講婆世宿(18:21)～弥山小屋(19:30)



前日に五番関にて男子チームと別れ川上村の民宿に泊るも、昨夕から雨が降り始め、明け方は激しい雨となる。気象情報の確認と送迎をしてくださるM先輩の助言を受け、本降りが治まり少雨になった頃を見計らって宿を出発し、久久能智神社を6時55分スタートと遅い旅立ち。本日より参加の宮本氏と女二人阿弥陀森を目指す。途中雨は降ったりやんだり、昨夜来の雨のため普段はさほど水量のないはずの滝が驚くほど量が増えてお

り、滝脇の道を登ったり横切るときは半ば沢登り状態になるなど四苦八苦しつつ、10時半合流予定のところを約30分遅れの10時55分に阿弥陀森で男子チームと合流する。

摩65阿弥陀森は、大峰道と柏木道との分岐点で女人結界門のある場所とあるが、特に碑伝や祠等はみられない。山頂には立ち寄らずそのまま南に下ると、「脇の宿」と書かれた道標の横手のモミの木の根元に碑伝が置かれてあり、ここが摩64脇の宿とすぐわかる。これより40分ほど歩くと経筥石への道標があり、錫杖が建てられた脇の木の根元に碑伝があった。経筥石への興味は強くあるものの、先を急ぐ為そのまま小普賢岳に行くと、山頂の岩に沢山の碑伝が置かれてあり摩63普賢岳と認識する。

さらに足を延ばし弥勒岳の山頂を通過するも、摩61弥勒岳に相当するような碑伝や祠は見当たらず、摩60稚児泊に向かう。苔むした平坦地に稚児泊と書かれたブリキの板が置いてあり、モミの木の下の石と共に碑伝があった。これより七つ池を過ぎ、鎖場、栈橋等スリルのある道を通り摩59七曜岳に着く。七曜岳山頂は狭いが、大普賢ファミリーやバリゴヤの頭等大峰らしい眺望で、手彫り木製の仏像と共に沢山の碑伝が岩の傍らに置かれている。

霧雨状態のすっきりしない天候の中摩58行者還りを探そうとするが見つからなかった（後日、水場と行者還小屋との中間地点辺りに見つける）。ガレ場の最終梯子を通過したところにある水場は昨夜来の雨のせいもあり、ホースから勢い良く水が流れていた。

行者還小屋に着いたのは15時20分位で、この地点でメンバーの疲労度や天候などを考慮し、ここで泊るか、それとも弥山小屋を目指すか判断することになる。疲れてはいるもののメンバー全員に極端な疲労は見受けられず、さらに雨も止んでおり、温かい食事と布団が迎えてくれることを励みに、遙か彼方の弥山小屋を目指すことに合意する。

なだらかな下りの中、摩57一の多和につく。一の多和池のほとりに錫杖が建てられてあり根元に碑伝がある。今まで見たことがない程満水の一の多和池を横目に、ただただ急ぎ摩56石休宿を通過する。ここは、碑伝と共に木と岩の根元に「石休宿」の標識があり急ぎ足でも見逃すことはなかった。次に摩55講婆世宿に着く。理源大使聖宝像があり、この像に触ることもなく雨は上がっているものの、辺りは薄暗くヘッドランプの準備をする。弥山小屋への最後の階段をあえぎつつ登り、小屋に着いたのは19時30分であった。

S先輩が前もって我々一行が遅れて到着することの連絡を入れてくださっていたこともあり、笑顔のスタッフが出迎えてくれ温かい夕食にホッとする。小屋は広く清潔で、ミニ売店と水10100円、コンセント持参であればスマホ等の充電が無料で、とても助かった。

本日は悪天候が予想される中での長時間歩きで、出発前から山行が危惧される状況であったが、大雨の本降りを回避するためにあえて出発時間を遅らせ、比較的安全に歩ける後半部をヘッドランプ使用覚悟で歩いたことが、全員歩き通せたことにつながったと思う。反面、急ぐあまり、摩の確認がややおろそかになったことを反省する。



第 65 靡 阿弥陀森



第 64 靡 脇の宿



第 63 靡 普賢岳

第 61 靡 弥勒岳 碑伝や祠は見当たらず

第 62 靡 笙ノ窟 通過地点でない



第 60 靡 稚児泊とブリキの標識



第 59 靡 七曜岳



第 58 磨 行者還 この石に金剛蔵王と彫られている



第 58 磨 行者還 遠目より見る



第 57 磨 一の多和



第 56 磨 石休宿



第 55 磨 講婆世宿 聖宝理源大師の像



経筥石への道標と祠

3日目 5月1日(月)

(天候) 快晴

(コース) 弥山～釈迦ヶ岳～千丈平(テント泊)

(メンバー) 西山・津村・松本・宮本

(報告者) 宮本

(ルート・時間) 総行動時間8時間40分

GPSデータによる 距離10.9km 累計高度(+)-808m (-)1027m

弥山小屋(7:50)～八経ヶ岳(8:20)～明星ヶ岳(8:50)～五鉢峰(10:10)～舟の多和(11:10)～揚子の宿小屋(12:00 昼食)～孔雀岳(14:15)～空鉢岳(15:15)～釈迦ヶ岳(15:55)～千丈平(15:25)



前日があまりにタフな行程だったので今日はゆったり 8 時前にまず弥山の第 54 靡を見てから出発。かなり気温はさがって霜が残っている。オオヤマレンゲはまだ蕾もつけていない。この辺りの所在不明や離れたところにある靡は確認できなかった。八経と明星ヶ岳の間には番号のついている靡はないはずだが、弥山辻にそれらしい石と碑伝があった。昔は百以上の靡があったらしいからここもその一つなのだろう。明星ヶ岳のすぐ先に石碑はないが多くの碑伝や仏具があり、位置から第 49 靡の菊の窟遙拝所とする。第 47 靡の五鉢嶺もリーダーが崖の上のピークまで探しに登ったが無かったとのこと。

明星ヶ岳から孔雀岳までは稜線の西側に道がついていることが多いのだが崩壊していやらしいところが何か所かあった。揚子の森辺りからは丈の短いササと青々としたバイケイソウ、ブナやトウヒなどの木立の美しい道がつづく。今日はどこを見渡しても山しかない。揚子の宿小屋はきれいな無人小屋。天気がよいので小屋の外でお湯を沸かして昼食をとる。

第 43 靡の仏生ヶ岳はピークへの分岐よりずいぶん手前があるので気をつけていないと見逃すところだった。第 42 靡の孔雀岳は奥駆け道がピークから離れているのでザックをおいて靡を探す。ピークに行った男性陣が見つけてくれた。孔雀岳の鳥の水場は水が流れていた。孔雀の視は東側ですごい高度感だ。五百羅漢と呼ばれる岩々が点在している。

釈迦ヶ岳の登りは鏢返し、椽ノ鼻、杖捨など名前のついた難所が続く。鎖場を降りる途中にオオミネコザクラが咲いていた。そのあたりの絶壁の岩にたくさん咲いていたが近づけず写真も撮れない。釈迦ヶ岳の山頂にこちらを向いている人が見えた。千丈平にテントなどを持ってきてくれるサポート隊と明日からの参加者だろう。早く山頂で会いたいと思うが登りがきつくてなかなか進まない。4 時前にへろへろで釈迦ヶ岳に到着すると 5 名の会員が迎えてくれた。だいぶ待たせてしまったようだけどうれしかった。

テン場の千丈平は 20 分ほど下った所で、テントを張ってくれていた。水場もある。後半の食糧などを受け取り、風を避けて夕食をすましてテントに入るとさらに強風になり夜には雨も降って寒かった。サポート隊に感謝。

この日は 15 ある靡のうち 10 か所確認できた。古い碑伝の中にひときわ新しい令和五年四月と手書きで書かれたお札があり、この 0 師の後を追うような気持ちだったが最終日に三月の札がありほぼ 1 か月前に熊野から入られたと判明した。靡を確認しながら歩くのはとても楽しく、苦しい時には碑伝に勇気づけられた。

(5 月 1 日サポート隊の報告)

12 時半に太尾登山口から本日から参加者 4 名とサポート隊 2 名がテント泊装と補充の食料品をもって、テン泊地の千丈平へ向かう。3 時に到着し、テント 2 張りツェルト 1 張りを設営した後、今朝弥山小屋を出発している縦走者を釈迦ヶ岳山頂で 4 時頃出迎えるため登頂し、元気に縦走してこられた 4 名を無事に迎えることができた。

千丈平は広い草原に針葉樹が間隔をあけて生えるテント設営適地、当日はやや強風であった。水場は 2、3 分登ると釈迦のかくし水があり水量は多い。(田部)

【未確認の靡】

- 第 53 靡 朝鮮ヶ岳 見つからず
- 第 52 靡 古今宿 見つからず
- 第 48 靡 禅師の森 確認できず
- 第 47 靡 五鈷嶺 1649m ピーク
にも確認できず
- 第 41 靡 空鉢岳 確認できず



第 54 靡 弥山宿 弥山山頂



第 51 靡 八経ヶ岳山頂の錫杖



第 51 靡 八経ヶ岳山頂の碑伝



第 50 靡 明星ヶ岳山頂



第 49 靡 菊の窟遙拝所



第 46 靡 舟の多和



第 45 靡 七面山遙拝所



第 44 靡 楊子の宿



第 43 靡 仏生ヶ岳遙拝所
仏生への分岐よりだいぶ手前にある



第 42 靡 孔雀岳 奥駆け道から離れた孔雀岳の
ピークにある

【遥拝所】



明星ヶ岳手前の弥山辻近くに番号がついて
いない行場 護法善神高崎？

第 40 靡 釈迦ヶ岳 釈迦ヶ岳のピークにある

【遥拝所】



椽の鼻 蔵王権現像

4日目 5月2日(火)

(天候) 晴れ

(コース) 千丈平～深仙宿～持経宿

(メンバー) 縦走者 西山・松本・宮本

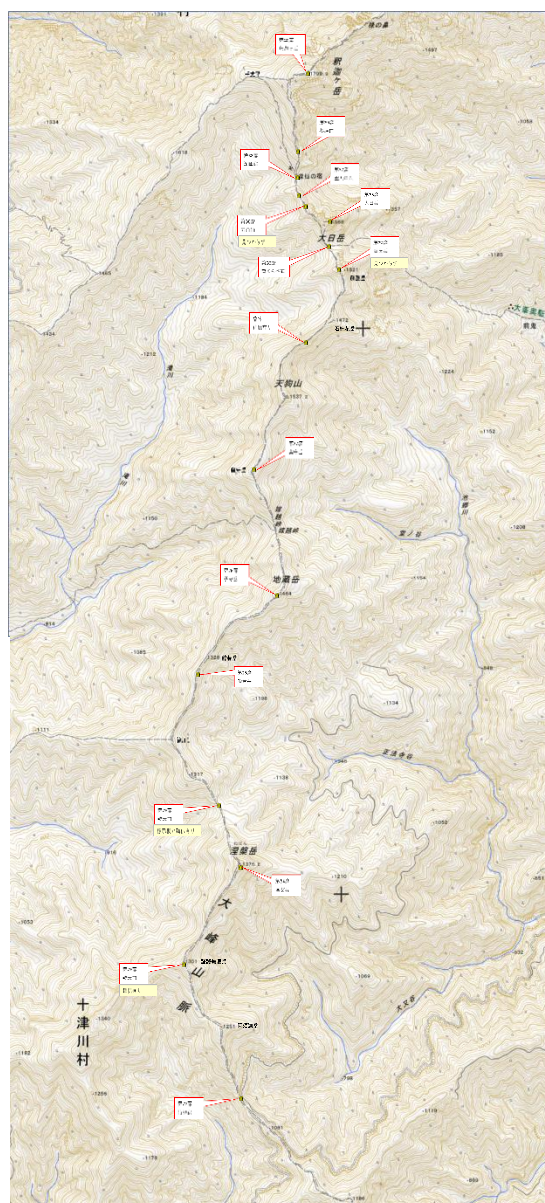
釈迦からの参加者 元島・鐵・米村・田部 計7名

(下山者 サポート隊 宮西・石田 途中下山 津村 計3名)

(ルート・時間) 総行動時間8時間55分

GPSデータによる 距離 10.4km 累計高度 (+) 774m (-) 1464m

仙丈平キャンプ場 (6:00) ～深仙宿 (7:00//7:25) ～大日岳ピストン (7:50//8:10) ～蘇莫岳 (8:40) ～石楠花岳 (9:10) ～天狗山 (9:45) ～奥守岳 (10:25) ～嫁越峠 (10:40) ～地藏岳 (11:15) ～般若 (11:40) ～涅槃岳 (13:05) ～証誠無漏岳 (13:50) ～阿須迦利岳 (14:30) ～持経宿 (15:01)



(報告者) 田部

朝は晴れてはいるが非常に寒く、外に置いた水には薄く氷が張っていた。そのため食事は深仙宿辺りで摂ることとなり6時に出発する。釈迦ヶ岳分岐までは登り、分岐から下ってゆくとまもなく第39 靡都津門の標識が登山道脇にあり、その数十m前方の巨大に出張った岩に靡の場所らしい穴が見える。笹に覆われた細い道がついているが危険なので西山リーダーのみ確認に行かれる。さらにガレた道を下ってゆき広い鞍部に出ると第38 靡深仙宿の立派な木造のお堂が建っており、近くには宿泊できる小規模な避難小屋もある。昨夜はテントが約10張も設営されていたとのこと。太陽も出て風はあるが暖かくなってきたので朝食を摂る。日差しは暖かいがこの辺りは木々の芽吹きはまだ先である。

道を下りながら進むと目の前に険しい岩山の大日岳が見えてきた。登り口の路肩に荷物をデポして、一般登山道で登るが木の根や大岩が連なりロープなども設置され、危険ですれ違いは特に注意して歩く。第35 靡大日岳山頂は狭いが立派な大日如来像が安置されており釈迦ヶ岳も見える。

太古の辻、前鬼へ下山する分岐で大きな二つの石柱があり第33 靡二つ石(表記は背くらべ石)である。ここよりいよいよ南奥駆道の始まりとのこと。標高も下がって来て登山道も岩やガレた道から土の道となり歩き易くなり、ブナやヒメシャラ、リョウブなど芽吹き、ツツジの木の蕾も膨らんでちらほら咲いている。これから登る南奥駆けの山々や歩いてきた釈迦ヶ岳などの山を振り返りながら足取りも軽い。昼には少し早い为天狗の稽古場の広い草原で休息し昼食を摂る。出発から5時間余り経過しているがこれからも第26 靡地藏岳(子守岳)、第25 靡般若岳、第24 靡涅槃岳、証誠無漏岳、阿須迦利岳と宗教的な名前の山々で靡を探しながら歩き今夜宿泊する持経宿を目指す。

また第23 靡の乾光門は文献で調べた証誠無漏岳ではなく、第24 靡涅槃岳までに標識があり、そこは拝み返し宿跡のようだった。

今日の行程の最後の山、阿須迦利岳への登りは細いトラバース道や岩を下ったり登ったりの険しい道であった。

前夜の睡眠不足や地味なアップダウンの繰り返しで疲労もたまってきており、持経宿の屋根が木々の間から見た時にはほっとした。小屋はストーブを焚いてくださり、毛布も1人3枚お借りできあたたかい屋内でゆっくり体を休めることができた。連休中であつたが宿泊者は15名に満たず十分なゆとりがあつた。また宿の近くまで白屋・池郷林道が通っており何名かはその脇でテント泊もされていた。

小屋の前にはポリタンクの水が沢山並べてあり、小屋を通る人は自由に補給でき、水場は林道を10分ほど歩くと沢から引いた水が豊富に出ていた。トイレは小屋の下にあり綺麗に掃除されていた。小屋の宿泊は事前に新宮山彦グループに予約を入れ、志納金1人2000円を当日小屋の箱に納めた。

第22 靡持経宿は小屋の南側に立派な不動堂が建っていて不動明王がお祭りしてあるとのことであつた。

(報告者) 元島

昨晩は強風と雨であつたがテント内では寒さの中割とぐっすり眠れた。ただし強風で度々シカが外から押しつけているのかと勘違いする位テントが外側から内へ押しやられそのたびに目が覚めた。

朝、テントの外に出ると晴れており、風もテント内で感じた強風でもなく、予定通り午前6時出発しますとの西山さんの一声。寒いのでテント場で時間のかかる朝食は摂らず手短に行動食を食べて出発。

まず、テント場の少し上にある水場（かくし水）にて補給し、第39 靡の都津門に向かう。都津門は、釈迦ヶ岳から深仙宿に下る途中にあり奥駆道から北東方向を望むと岩にくり抜いた穴が見える。西山さんが一人この穴を確認に走る。

更に下ると深仙宿である。此処には避難小屋と共に立派なお堂があり、靡を記録にとどめ朝食を取る。ここのお堂に向かって拝礼し後ろを振り返ると台高の峰々が展望されさぞかし気持ちの良いお勤めができることであろう。

深仙宿から150mほど進んだところで右上の岩場に第37 靡・聖天の森が確認される。奥駆道に戻り更にすすむと100mも歩かぬうちに次の靡である第36 靡・五角仙があるはずであるが見当たらず。

次は第35 靡・大日岳である。ザックを大日岳分岐でデポし正面の立派な一枚岩を迂回し山頂で靡を確認。

大日岳を下りてザックを回収し南に向かうと鞍部に太古の辻がある。そのすぐ南側に第33 靡・背くらべ石（事前に調べた資料では靡の名称が「二ツ石」とあったもの）を確認できた。

太古の辻より標高差70mほど上り詰めたところに蘇莫岳があり、山頂付近を探すも第32 靡は見つからず。

蘇莫岳を下り、石楠花岳を西に迂回し天狗山の手前のピークで石楠花の木の根元に碑伝を確認する。靡の標示はなし。恐らく此処も75 靡に選定されなかった数ある中の一つであろう。

天狗山を過ぎ展望が開けた奥守岳山頂に着く。当たり前の話であるが見渡す限り山また山のどこまで行っても果てしなく続く奈良の峰々である。あー、奈良の奥地に来たんだという感慨が改めてふつふつと湧き上がって来た。静寂の中でこの峰々を眺めていると心が安らぎ、夢であった大峰奥駆道に今いるんだという実感できた。此処には第27 靡の標示板と碑伝が確認された。

奥守岳を下りるとそこには嫁越峠があった。その昔、大峰全体が女人禁制であったころ十津川村から北山村へ嫁ぐのにこの峠で3尺幅だけ通れるようにしたとのこと。そう言われるとこの峠が不思議と愛おしくなる。

嫁越峠より標高差100mほど登ったところに天狗の稽古場がありそこでしばし休憩する。ここは天狗が稽古をできそうな平坦な地形となっている。展望もよくまったりと休憩するには最高。

250mほどすすむと子守岳（別名地藏岳）の山頂となる。第26 靡の標示板と碑伝が確認できた。

子守岳を下り般若岳に至る。般若岳より南100mほどの道沿い第25 靡・般若岳の標示板を確認。その背後にあるピークへ標高差10mほど登ると碑伝があった。

再び奥駆道に戻り滝川辻の分岐道をやり越し1317mのピークと涅槃岳の間の鞍部に「第23 靡 乾光門」の標示板と碑伝有り。乾光門の靡はまだ先の証誠無漏岳にあるのと思っていたので想定外であった。

更に標高差170mほど登ると涅槃岳である。山頂で「第24 靡 涅槃岳」の標示板と碑伝が確認された。

涅槃岳より140mほど下り更に70mほど登り返したところに証誠無漏岳がありそこに碑伝があった。ここが元々の「第23 靡 乾光門」であったのだろう。

証誠無漏岳を南に下りて更に阿須迦利岳を越えていくとようやく今晚の宿である持経宿が見えてきた。靡を探す方に意識がいき体の疲れはさして認識していなかったもののやはり小屋が見えるとほっとした瞬間であった。

小屋には事前にコーラが販売されていると聞いていたので早速飲もうかと意気込んでいたが、あいにくコーラは売り切れで代わりに缶コーヒーを頂く。

ザックを小屋に置き水場の確認に行く。小屋から北東方向に林道を4分ほど下って行くとホースからとくとくと流れでていた。甘く飲みやすい軟水であった。

小屋に戻ると新宮山彦グループの方がストーブに薪をくべて暖の準備をされていた。晴れていたとはいえ夜は冷え込む。グループの方のご配慮に感謝！



第 39 靡 都津門 標識は登山道にある、

第 39 靡 都津門 靡は登山道から数十m前方の巨大に出っ張った岩に空いた穴



第 36 靡 五角仙
幾つかの巨岩の連なりがササの中に入り確認できず。

第 34 靡 千手岳 確認できず

第 38 靡 深仙宿
立派な木造のお堂が建っている



第 37 靡 聖天の森 樹木や岩



第 37 靡 聖天の森 経塚大岩の下に碑伝が安置されている。



第 35 靡 大日岳
大日岳山頂の大日如来像



第 35 靡 大日岳
大日如来像の台座の下に碑伝



第33 靡 二つ石（背くらべ石）
太古の辻 前鬼へ下山する分岐
周囲には他にも小さな岩が沢山ある

第31～28 靡は奥掛け道から外れている

第32 靡 蘇莫岳
木の根元に山名標識のみある



第27 靡 奥守岳 奥守岳山頂



第26 靡 子守岳（地藏岳）山頂



第25 靡 般若岳 般若岳山頂のトラバース道に標識が設置されている。



第25 靡 般若岳 山頂の碑伝



第23 靡 乾光門
第24 靡 涅槃岳まであり 拝み返しの宿跡に標識が
設置されていた



第23 靡 乾光門 碑伝



第24 靡 涅槃岳



第22 靡 持経宿 不動堂不動明王を祭る

【遥拝所】



石楠花岳を過ぎ天狗山へ向かう途中の枯れ木の
下に 2 枚の碑伝が安置されている



証誠無漏岳 碑伝のみ



阿須迦利岳 碑伝のみ

5日目 5月3日(水)

(天候) 快晴

(コース) 千丈平～深仙宿～持経宿

(メンバー) 西山・松本・宮本・元島・鐵・田部・米村

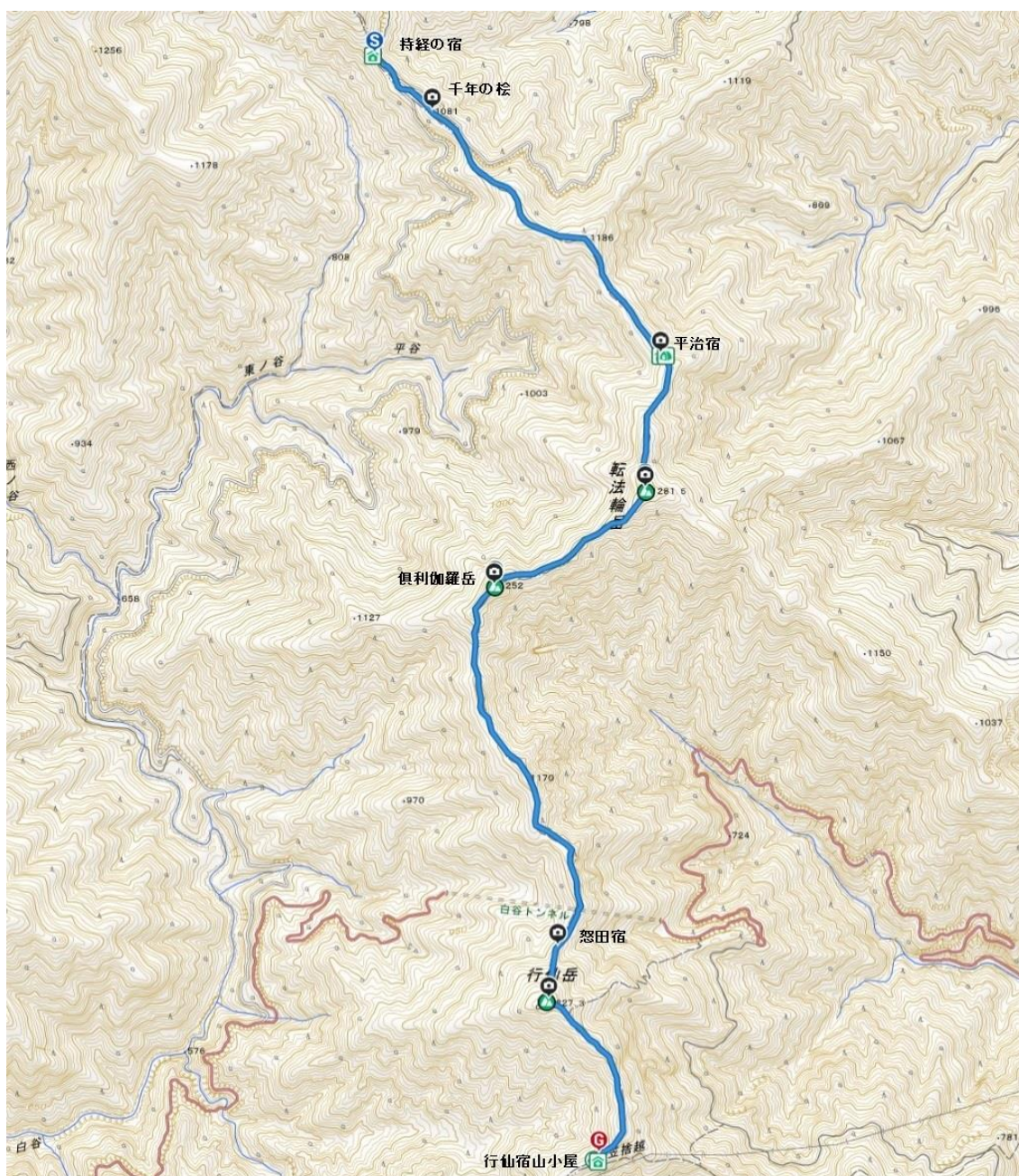
(報告者) 米村

(ルート・時間) 総行動時間 7時間30分

GPSデータによる 距離6.3km 累計標高(+) 600m (-) 562m

持経の宿(7:30)～持経千年桜(7:44)～平治宿(8:40//9:05)～転法輪岳(9:25)～俱利伽羅岳(10:15//10:30)

～怒田宿(11:45//12:00)～行仙岳(12:10//12:20)～行仙宿山小屋(12:40)



持経の宿を7時30分に出発する。この日は全行程中一番距離が短いため気持ちが楽である。お天気も良く花や景色を楽しみながら次の靡を目標に歩き出す。

奥駈道らしい幽玄な雰囲気の中を歩くのは気持ちがいい！シロヤシオやヤマツツジやアケボノツツジが新緑の中ひと際綺麗で思わず立ち止まる。すぐに巨木百選に選ばれた千年桜が現れ、横にある不動堂に番号のない靡があった。菓子が供えられ綺麗に管理されている。ここより1時間程で第21靡の平治宿に着いた。

持経の宿と同じグループの新宮山彦ぐる一ぷが管理している小屋である。水の入ったポリタンク、毛布、薪ストーブ、外にトイレがある。規模は小さいが縦走者にとっては避難小屋があるのは有難い。水場は白谷側へ7分程下ったところにあるが、崩れて足場悪く、道も不明瞭のため、現時点では使用しない方が賢明である。

転法輪岳には二等三角点横に靡があり、その先の俱利伽羅岳山頂にも靡があった。白谷トンネルを越すと第20靡の怒田宿に着いた。現在、宿はなく宿跡に靡のみが残っている。

先の行仙岳へは山頂と捲道と二手に分かれているが、捲道への標識には「山頂を通らずに行仙宿」へとあった。一行は靡調査のため山頂を目指し登る。10分程登った先の行仙岳の山頂に第19靡があった。

そこより20分程歩くとこの日のゴールである行仙宿山小屋に到着する。小屋の横には立派な行者堂があり、ここも拝所となっているようだ。役行者像、金剛蔵王大権現像、林実利師像、聖徳太子像が祀られているそうだ。

小屋には新宮山彦ぐる一ぷの方々に温かく向かい入れてもらう。普段は無人だがGW中や大人数の団体が利用する時などはこのぐる～ぷのメンバーさんが詰めておられるとお聞きした。入り口には水が入った20Lのポリタンクがぞろりと並んでいる。新宮山彦ぐる一ぷの方が運んでくださっているが、早くに着いた登山者にも水汲みをお願いしているとの事。水場は往復25分、水量は豊富。

元気なメンバー4名が行ってくれたが、かなり厳しく道迷いもしそうな道だったようだ。新宮山彦ぐる一ぷの皆さんはボランティアで、新宮市の他、奈良市内や大阪、遠くは兵庫の三田から来てくださっていると聞きし、ただただ感謝である。

人数分のおでんとマグロのカマの炭火焼きを御馳走になった。最高に美味しかった！この日は連休中で人手があり、ビール(500円)とコーラ(300円)も購入できた。トイレは綺麗に清掃され、トイレトペーパーまである。夕方から電気が入ると、スマホの充電もどうぞ～と何度も親切に声を掛けてもらった。

また、標高が高いため夕方を過ぎると気温が一桁台になり寒いが、毛布と薪ストーブで身体だけではなく心まで温かくなった。心から有難い。一泊一人2,000円では安すぎるくらいの設備と心のこもったもてなしに大・大感動である！！

実は前日がバテバテで、この先どうなるのだろう？と気弱になっていたが、さあ、明日からまた頑張って歩こう～～という気持ちになった。奥駈縦走、アルプスと山話は尽きないが翌日は5時出発のため早々に就寝した。



第 21 靡 平治宿



第 21 靡 平治宿 碑伝



第20靡 怒田宿 今は宿跡のみ
白谷トンネルを越え行仙岳へ登る手前にある



第20靡 怒田宿 碑伝



第19靡 行仙岳 山頂にあり



第19靡 行仙岳 碑伝

【遥拝所】



持経の宿より15分程先の巨木百選、千年桧



千年桧の不動堂に拝所あり



転法輪岳の山頂二等三角点横に拝所あり



二等三角点と拝所



倶利伽羅岳の山頂に拝所あり



倶利伽羅岳の山頂 遥拝所

6日目 5月4日(木)

(天候) 快晴

(コース) 行仙小屋～玉置神社

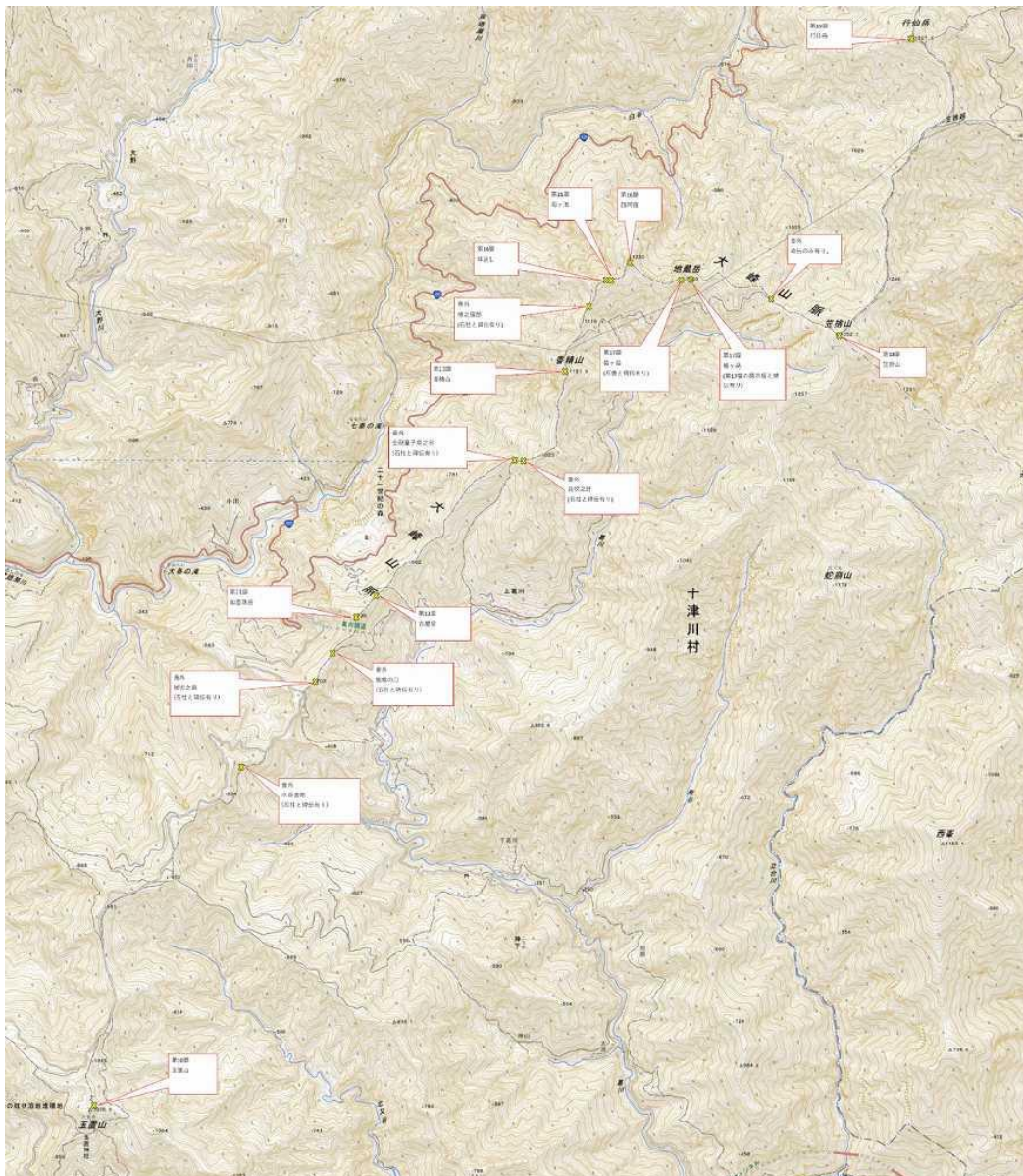
(メンバー) 西山 松本 宮本 米村 田部 元島 鐵

(報告者) 鐵

(ルート・時間) 総行動時間 10時間 26分

GPSデータによる 距離 13.9 km 累計標高 (+) 1267m (-) 1354m

行仙小屋 (5:00) ～朝食；笠捨山 (6:55) ～地藏岳 (8:10) ～四阿宿 (9:15) ～菊ヶ池 (9:56) ～
栞返し (9:58) ～香精山 (10:25) ～古屋宿 (12:04) ～如意宝珠岳 (12:16) ～ 昼食；蜘蛛の口 (12:
27) ～玉置山 (15:26) ～玉置神社 (15:36)



薄明るい5時頃、行仙小屋を出発。途中、朝焼けと雲海に見惚れつつ足元に気を付けて先を進む。笠捨山までは比較的穏やかな道で、ヤマツツジやシロヤシオ、アカヤシオが時折微笑みかける。すっかり明るくなった笠捨山で朝食をとる。食べると元気が出てきて今日も良い日になりそうだ。送電線のある個所は木々が無くガレており、視界が開けて地蔵岳らしき山がこんもり見えてきた。昔はもっと鬱蒼と木々が茂っていたであろう。

第18 靡の笠捨山は、山頂に標示板と木札があり、第17 靡の槍ヶ岳は、槍ヶ岳（地蔵岳）手前に標示板・槍ヶ嶽と彫られた石碑と碑伝、槍ヶ岳の南側を巻いて行くとお地蔵様が祀られていた。地蔵岳辺りは鎖やロープの設置された岩があり、安全第一に少し間を開けて歩く。険しい岩陰斜面にて可憐なヒカゲツツジと初対面。足元にはイチヨウランやイワカガミがひっそりと咲いており、お花たちが心を和ませてくれた。南下し、標高も徐々に下がってきたからか、日に日にお花の種類も増え新緑も眩しい。更にお天道様のお陰で、時折我々が歩いた道程が見え、奥深い雄大な峰々が私たちを後押ししてくれた。

第16 靡の四阿宿は1230m東屋岳の頂上付近に、又第15 靡の菊ヶ池は四阿宿から下った辺り、第14 靡の拝返しは、菊ヶ池から約20m先の位置と、比較的間隔が短い。この辺りから針葉樹林が増え、ギンリョウソウがひょっこりお目見えだ。第13 靡の香精山は1122mの山頂付近、第12 靡の古屋宿は如意宝珠岳の手前約200mの付近に、それぞれ標示板と碑伝・石碑を確認した。第11 靡の如意宝珠岳は736mの山頂付近に標示板と仙眺之森と書かれた石碑と碑伝があった。本日の目的の靡に目途が付き、ホッと一息、如意宝珠岳から標高差80mほど下った鞍部の蜘蛛の口と書かれた石碑付近でランチタイム。お湯を沸かし温かい物を口にする。

玉置山まで車道を横切ること数回、日差しがきつくジワリと肌をさす。あ～木陰がお肌に優しいワ。第10の靡玉置山では花盛りのシャクナゲが私たちを温かく迎えてくれた。玉置山には標示板があったが碑伝が無く、その後玉置神社でも碑伝を探してみたものの見つからなかった。

この日の予定の靡は、昨日の行仙岳を含めて全て場所を確認できた。今日は靡の名が書かれた比較的新しい木製の標示板を立ててある所が多く、それを目安に石碑や碑伝を確認する事ができた。それ以外で番外になるが、古い石碑と碑伝が何ヶ所もあり、昔あった靡の一部であろうと推測する。かつて百以上もの靡があったとの事、沢山の人が其々の想いを胸にこの道を歩いたんだなあ感慨にふけりながら先人達が築いた道程を一步一步踏みしめた。



第 18 靡 笠捨山
笠捨山山頂に標示板と碑伝



第 17 靡 槍ヶ岳
槍ヶ岳(地蔵岳)手前に標示板と碑伝



第16 靡 四阿宿
東屋岳山頂に標示板と碑伝



第15 靡 菊ヶ池
東屋岳を下ったところに標示板と碑伝



第14 靡 拝返し
菊ヶ池から20mほど進むと標示板と碑伝



第13 靡 香精山
香精山山頂で標示板と碑伝



第12 靡 古屋宿
如意宝珠岳の手前200mほどの所に標示板と碑伝



第11 靡 如意珠岳
如意宝珠岳山頂に標示板と碑伝

【遥拝所】



笠捨山から地獄岳の途中に碑伝のみ



槍ヶ岳の南側を巻いて行くと仏像と碑伝



檜之宿跡
拝返しから 90m ほど下った檜之宿跡で碑伝



貝吹之野
塔ノ谷峠の手前 100m 付近に石柱と碑伝



金剛童子塔之谷
貝吹之野から 100m ほど進むと石柱と碑伝



蜘蛛の口

如意宝珠岳から標高差 80m ほど下った鞍部に石柱と碑伝



稚児之森 祠と碑伝



稚児之森

「蜘蛛の口」の鞍部から標高差 50m ほど登り返して 703m のピークに石柱と碑伝



水呑金剛 稚児之森から車道を織り交ぜて 1km ほど進むと、石柱と碑伝

7日目 5月5日(金)

(天候) 快晴

(コース) 玉置山から熊野本宮大社

(メンバー) 西山、松本、元島、鐵、宮本、田部、小泉、森川

(報告者) 森川

(ルート・時間) 総行動時間 10時間 54分

GPSデータによる 距離 19.7km 累計標高 (+) 1182m (-) 2110m

玉置神社駐車場 (5:00) ~玉置辻 (6:10) ~水呑金剛分岐 (6:40) ~水呑宿 (6:55) ~大森山 (8:20) ~
岸の宿 (9:20) ~五大尊岳 (10:10) ~大黒岳 (11:40) ~吹越山 (12:55) ~吹越峠 (13:45) ~
七越峰 (14:20) ~熊野川徒渉 (14:50//15:10) ~大斎原 (15:20) ~熊野本宮大社 (15:45)



早朝の午前5時に玉置神社の駐車場を出発、昨日頂上を踏んでいるので参道に行く主部隊と別れて、まずは玉置山頂上を目指す。樹々に覆われた緩やかな登りを経て開けた頂上に到着。真新しい「第十摩 玉置山」の標柱がある。下調べの段階ではこの新しい標柱の情報は無かったので、おそらく今年設置されたものだろう。同じものがこの後第4摩まで設置されていた。

急坂を下り、玉置神社本殿前で本体と合流して玉置辻を目指す。道は緩やかな植林の中のトラバース道で展望はないが歩きやすい。犬吠檜を通過してほどなくして車道に飛び出したところが玉置辻である。車道を横断して道標に従い山道に入る。道はほぼ水平に続き約40分で水呑宿への分岐で、「左大森山より熊野地 右水呑金剛へ」の標柱がある。入口は比較的はっきりした踏み跡だが足を運ぶ人は少ないようで、細く崩れやすいところもあり、先に進むほど踏み跡もはっきりせず、岩場下のガレ場を慎重に横切った先に「第九摩 水呑宿」の標柱があり、石碑の足元に碑伝が収められている。分岐からは約80mの下りとなる。参拝をすませて分岐にもどり大森山を目指す。道は徐々に勾配がきつくなり、九十九折れ道を汗を流しながらゆっくり登る。

稜線に登りきると緩やかな尾根道となり広々とした大森山に到着、展望はなく杉の木の根元に碑伝が置かれている。この先三角点のある大水ノ森を通り過ぎ、ロープのある急な下りを辿り次の摩の「岸の宿」を目指す。下調べでは篠尾辻までの途中で場所がはっきりしないようなことだったので、左右の斜面に注意しながら下る。道が水平になったあたりに真新しい標柱「第八摩 岸の宿」があり傍らの杉の木に「篠尾辻」の木札、そして足元に碑伝が置かれていた。そしてここからすぐに「切畑 萩」分岐の道標がありこちらが篠尾辻（切畑辻）と思われる。さらに細い尾根のアップダウンからひと登りで「第七摩 五大尊岳」に到着（五大尊岳北峰？）、不動明王の台座と多くの碑伝、その横に新しく平成21年5月に再建された不動明王が奉安されていた。

さらに50m程の木の根に覆われた細尾根の急坂を登ると825mのピークに達する。地図によってはこちらが五大尊岳となっているが標識はない。ここから所々ロープをたよりに急坂を下り約1時間余りで「第六摩 金剛多和」に到着、広場状の一角に祠があり役行者像が安置されている。ここからすぐで水場まで3分の標識があるが「山と高原地図」にはない。丁度水汲みに行ってきた人がいて、岩場を流れているとのことだ。緩やかな登りを続けるとやがて「第五摩 大黒岳」の真新しい標柱があり、三角点標石の根元に碑伝が置いてある。山頂とはいいいながらならかな尾根道のピークで広がりも眺望のない。ここからはゆるやかな下りが続き、約1時間で山在峠に到着、宝篋印塔の祠があり少ないが碑伝もある。

道路を横切り緩やかに上り吹越山を通過、少しの下りで行者堂のある「第四摩 吹越山」に至る。行者堂のなかにも役行者の像がある。道路を横切り再び尾根道を通り吹越峠を過ぎると展望広場に出る。眼下にこれから徒渉する熊野川、その対岸に大斎原の大鳥居が聳えている。このあと七越峰を越えるとあとは下るのみ、道路にでると反対側のガードケーブルを乗り越え標高差約50mの踏み跡のない不安定な急斜面を下る。

河原に降り着くと対岸に大鳥居が聳えている。広い河原を進み、流れの手前で徒渉の準備をする。対岸には奈良山岳会のメンバーが出迎えてくれる。膝くらいの深さの流れを中州を挟んで2回横切って対岸にわたり大斎原にお参りしたのち、熊野本宮大社に参拝して奥駈けを無事終えることができた。



第10 靡 玉置山 山頂の靡きの標柱



第10 靡 玉置山 玉置神社本殿



第9 靡 水呑宿



第8 靡 岸の宿の碑伝



第7 靡 五大尊岳 (北峰?)



第6 靡 金剛多和



第5 廡 大黒岳



第4 廡 吹越山 祠の中には役行者像



第1 廡 熊野本宮大社の御社殿

【遥拝所】



大森山山頂



825mのピーク、五大尊岳南峰か？

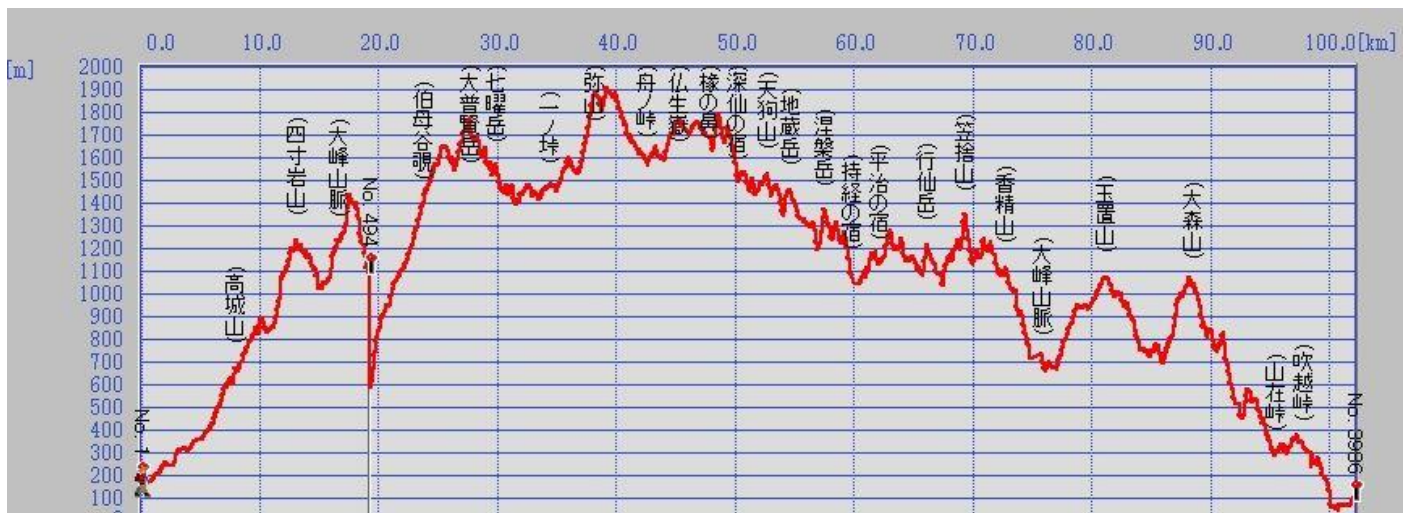


山在峠の宝篋印塔



七越峰延命地藏尊、ここにも沢山の碑伝

【全行程の標高（20km 辺りは女性が歩いたルートを示しています）】



【苦しくも楽しかった山行の思い出集】



早朝4時、柳の渡しをいざ出発



最初の摩 柳の渡し



暗闇の中美吉野橋を渡る



吉野山全体を見下ろす



こんな感じの長い登り道が多い



雨の中、上谷の久久能智神社を出発する



男性陣が待っている阿弥陀森まで5.8キロ！



女性陣との合流地へ向かう男性陣



天気悪いのに山は見える 弥山らしき山が遠すぎる



風が強くなって良かった



弥山が近づいたけどまだまだ遙か遠い！



弥山小屋にて 昨日の自分を褒めてあげたい4人



道が崩壊しているので慎重に



釈迦ヶ岳見えた



五銚峰の手前 ルートは右に下りる リーダーがまっすぐピークまで登って靡を探すも見つからず



お湯を沸かしてゆっくり昼食休憩



お天気良くてルンルン



靡を探しながら歩くのも楽しい



孔雀観にて かつこつけて落ちないでね



釈迦の手前 疲れてきて登りは必死



鎖場の途中にオオミネコザクラ



釈迦ヶ岳山頂の出迎えを受けて
お待たせしました



千丈平のテント場
テント設営ありがとうございます



千丈平の水場



太尾登山口より合流隊とサポート隊が出発する。



寒い仙丈平をサポート隊に見送られて南奥駆道へと
出発



風をよけて深仙の宿で朝食



陽ざしの暖かい天狗の稽古場の草原で昼食休憩



木々も芽吹き緩いアップダウンが続きます



長い行程の末、やっと持経の宿に到着しました。



白谷池谷林道歩きから奥駆道へ入ります



持経千年檜の大木



新緑も深くなりアケボノツツジも咲いています。



今日の行程は余裕です。



行仙ノ宿に到着。行者堂が小屋の前にあります。



急な道を下る行仙ノ宿の水場。本日1番の難所



行仙ノ宿の中の様子です。



夜明け前に玉置神社へ向かって出発準備



歩いていると稜線から太陽が昇ってきました。



笠捨山山頂到着



地藏岳山頂下のお地藏様



険しい山道に可憐なイチヨウランが咲いていた



本日1番の難所地藏岳の下り、鎖や三点支持で1人1人慎重に下る。



南に下るにつれてシロヤシオの花も満開になり春を感じる



随所にアケボノツツジが咲き花の中を歩く



大峰奥駆け道の道標、玉置神社も近い



玉置神社にて とうとう最終日 今日も晴れ



ユキザサが咲いていました



激下りを何度も下りる 道が乾いていて良かった



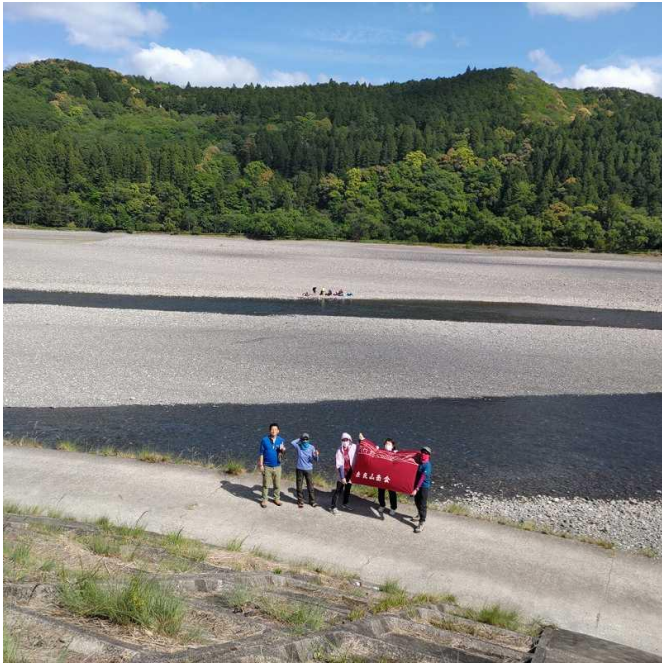
熊野川が近づいてきたよ



熊野本宮の鳥居がはっきり見えます



お迎えの会員を見つけたときは感激しました！



対岸の米粒はこれから川を渡る私たち



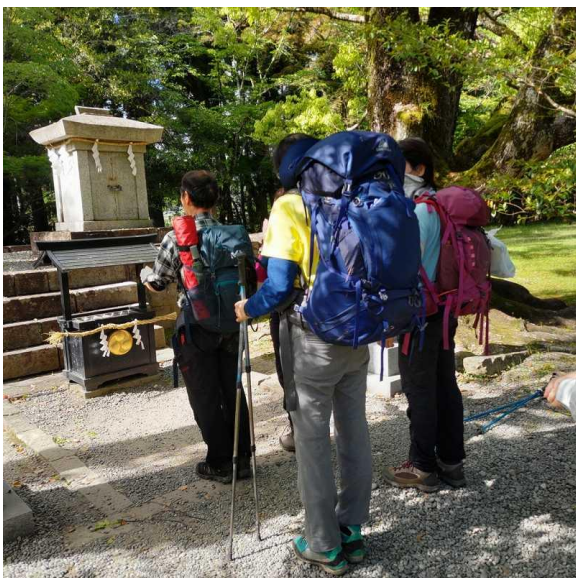
K氏の手書き横断幕 大きいです



流されそうになりました



サンダルないと痛いです



まず大斎原で無事下山の報告とお礼です



熊野本宮大社 八咫鳥ですね



世界遺産の碑の前で記念写真



今夜の宿泊地 川湯温泉 こどもの日でした
川向こうの露天風呂 夕食後露天風呂での女性陣のおしゃべりが民宿にも響いていたそう



? 日ぶりの温泉風呂に入りご馳走にかぶりつきました
会費で飲めるというビールもぐいぐい
コロナ禍以来初の奈良山での大宴会
差し入れやカンパもたくさんいただきました



翌朝 解散前に記念写真
ありがとうございました! 幸せでした
奈良山90周年 バンザーイ!!

サポート隊の記録

幻の「サプライズ計画」

清岡幸司

齢、八十半ばになってくると体力の衰退がひしひしと感じる。九十周年記念と銘を打って計画された奥駈道縦走に一部区間だけでも参加したいが決断できない。何とか関わるができないか考えたのがサプライズ計画である。

そこで考えついたのが、縦走コースの何処かで、事前に公にせず待機して縦走者パーティを出迎えて激励支援するささやかなイベントである。できれば負担にならないフルーツやドリンクを支給することも。この秘めたる計画は予期していない現実が目の前に現実に現れるという意外性を狙うところにミソがある。

縦走支援にかかわっていないメンバーに話なすと早速に賛同を得て実行することになる。メンバーはU氏、I氏、T嬢と私の4名に決定である。

激励する場所に入るアプローチなどを考えると、行者還りトンネルの稜線辺りが最適ということが分かる。国道の90番辺りからの登山道を登れば約1時間ばかりで稜線に辿り着く。少々体力が劣っていてもなんとかなる最短ルートだ。

縦走パーティが何時にここを通過するかを推定して奈良を早朝にできればその時間に確実につくという事前のシミュレーションを兼ねて19日に現地に調査にいった。そして90番から上がった稜線の地点がチームを迎えるのに地形的にも最適であることも分かった。できれば横断幕などを掲げてお祭り気分を演出できないかなども検討することになる。

縦走組が洞辻茶屋を当日何時に出発するかにより出迎える時間も変わるので、計画では5:00/6:00出発を想定して通過時間を13:00/14:00前後と推定したが、その日の天候や阿弥陀ヶ森での合流時間などの若干の変更があり、実際に行者還小屋にパーティがついたのは15:30であった。

準備を進めて出発の2日目に縦走パーティをサプライズ邂逅することを待ったが風雨が激しく天候が荒れるとの予報。悪天候の中、稜線で長時間待機するのは心配ごともあるので、残念ながら中止することにし、幻の計画になってしまった。

折角、作成した横断幕は最終日、熊野大社に到着したパーティを歓迎しお迎えするとともに慰労会の宴席に掲げて花を添えることが出来たのはせめてもの慰めであろうか。

スモールサプライズ

伊藤 美奈子

当初の「サプライズイベント計画」が天候の事情で残念ながら中止となりました。この計画の準備段階で私も横断幕の制作に少しだけアイデアで参加することになったいきさつや、最終日に熊野大社にこの横断幕を届けることになった経緯などをお話ししたいと思います。

K氏から横断幕制作の相談を受けた時に、文言や配置など意見を述べました。それを元に制作された横断幕を見て欲しいとの要請があり見せていただきました。予想通りのサプライズイベントにふさわしい出来栄でした。しかし、何か物足りなさを感じて奈良山岳会の山のロゴマークを下部に入れたらどうかと私なりに感じた提案をしました。その結果、横断幕は一段と見栄えのする仕上がりになり出来上がり大満足です。

最終日5月5日の前日、K氏が体調不良で歓迎のお迎えならびに慰労の宴席に参加出来なくなったことを知り、またU氏も参加出来なくなり、私一人で向かうことになりました。最終的には、車の手配に余裕があることで便乗させていただくことになりました。私の熊野本宮大社行は奥掛道全山縦走の踏破を祝福することに加えて、ゴールでの横断幕を掲げることになりました。

長距離に加えて渋滞などでハラハラしましたが、パーティが到着する前に熊野大社本宮前に着き、パーティの方々が渡渉しながら近づいてくるのを川の堤防で横断幕を掲げてお迎えすることができました。

また、記念撮影ならびに慰労会の宴席で横断幕が輝いていたのはご承知の通りです。

女性陣の山上ヶ岳迂回と釈迦ヶ岳のサポート

宮西節子

山岳会の大きな企画に協力しないといけないと思い五番関から上谷登山口への女性会員の回送と釈迦ヶ岳の荷揚げ、荷下ろしに参加した。

桜井駅で阿弥陀森から参加する宮本さんをピックアップし、2時半にトンネル口に到着すると松本さんは疲れた様子も見せず既に到着していた。そこから川上村の道の駅まで運転していると大きなザックを背負った女性が歩いている。声をかけて乗せてあげると東京から来た全山縦走の人だった。六田駅を8寺に出て五番関は13時ごろか、今日は白川渡のキャンプ場と言う。車で送ってあげようと言うのに固辞された。回り道は25kmを越える。つわものがいると感心した。

既に雨は降っていて前線がいつ通過するかずーっと気になる。雨雲レーダーとにらめっこしながら翌日の出発は7時にすると強い雨は通り過ぎている頃と判断して6時民宿出発とする。夜中4:30ごろすごい雨が降っていて前線が通過していた。上多古の本流沿いの道を離れ急な上谷への林道を登り久々能智神社に到着する。雨は依然と降っているが危険な場所はないし頑張ると送り出した。本当は沢の出合の水量が気にはなっていたが上流なので大した水量にはなっていないだろうと考えていた。帰りの上多古本流沿いに咲いている藤の花が満開でガスにけむり幻想的だった。

3日目釈迦へのサポートは天理駅で元島、鐵氏を太尾へ送ることから始まった。旭口からの悪路で3時間かかる。コロナ前から釈迦へは来ていない。山は益々森林が無くなり草原化している。

千丈平に設営したけれど風が強い。設営後早速隊を迎えに行く。目視では稜線に見えないけどきつと釈迦手前にいると思い大声で呼ぶ。皆の姿が見え始めた時は感動ものである。

風が強くて食事もゆっくり食べれない。テントは雨と風に吹かれながら顔まで被ってくる。

朝も強風だったので本隊もサポート隊も早々と出発した。短い出会いだっただけ山の中で一緒に過ごした貴重な時間だった。

熊野本宮大社への出迎えと打ち上げ

太田 晃司

奈良山岳会 90 周年記念として大峰完全縦走の提案がされた当初、仕事柄どのような日程が入っているか分からず全山縦走は難しいと感じていた。ただ、千丈平から釈迦岳を経由して熊野本宮までの縦走なら日程的に確保できると考えた。しかし、母の他界、市議会 5 月臨時会の日程差し込みと、予期せぬ事により今回の縦走参加を断念することになってしまった。

縦走最終日を迎えた 5 月 5 日（金）、縦走チームを熊野本宮で迎えるため、伊藤さん、有村さんをピックアップして、現地へ向かう。熊野本宮大鳥居・東側の河原駐車場に到着したのが 14 時 30 分。西山さんを筆頭に縦走チーム 8 名が河原を渡渉開始したのが 15 時。ほぼオンタイムでのお出迎えとなる。大きなトラブルの様子もなく、8 名が 2 回の渡渉を終え、私たち送迎チームのもとへ到着。その足で熊野本宮旧社地大斎原、熊野本宮大社へと縦走の無事を願ってのお参りへ。

その日は川湯温泉・民宿立石でサポートチームを含め、15 名での宴会となった。コロナウィルス感染症の影響下で奈良山岳会の総会後の懇親会も長らく実施できていなかったことを考えれば、当会での懇親会は随分久しぶりの開催のように感じる。また会としても同影響により集会への参加者人数の減少傾向があったなか、今回の全山縦走は会員の結束力を高めるうえで大変重要な行事になった。宴会ののち、民宿前を流れる大塔川から聞こえてくる、透き通るようなカジカガエル（河鹿蛙）の鳴き声が印象的だった。

翌 6 日は朝から雨。今回の縦走期間は天候不順が心配されていたなかで、30 日は雨との戦いとなったが、5 日までよく天気が持ったものだと思う。縦走チームの体力、天気、そしてサポートチームの支え、すべてが整い 90 周年山行が無事に完了したことにサポートチームの一人として感謝したい。次こそは縦走本隊の一翼を担いたい。100 周年に向かって歩みを進めよう。

奈良山岳会 90 周年記念 大峰奥駈道縦走 総括

西山 哲也

今年は奈良山岳会 90 周年の記念の年。ご縁があり入会してそういうタイミングに三役を仰せつかって何かみなさんの記憶に残るものはできないかと考えていました。

私が入会して間もない 2015 年に S 木さんと奥駈道を縦走しました。後をついていくのが必死の 5 日間でしたがその後の人生に影響を与えた大きな山行となりました。その奥駈道にもう一度行ってみたいと思う気持ちは数年前からありました。

奥駈道完全縦走を90周年企画でどうかとS木さん、M西さんに相談してみたところ面白い、やろうと後押しをいただき一気に気持ちが進みました。会長、副会長にも了承いただき初めての実行委員会を予定したのが2023年1月24日。関西に大雪が降り初回の会議開催を延期しました。スタートなのにと少しざわついた気持ちを覚えています。1月30日にファミリーレストランで初回の実行委員会を無事開催。M西、I田、O田、T村、私の5人。

縦走の内容を検討して2月5日に奈良山岳会MLに発表。果たして参加者がいるのか心配していたところ縦走者もサポートメンバーも早速の申し込みをいただく。

3月3日参加者全員で会議を開催。縦走者、サポート者の流れ等を初めて具体的に話し合う。私は現実味が湧いてきて気持ちがワクワクになりました。参加者それぞれが家庭の事情や、体力、技術、日程等、いろんな条件がある中で奥駈道を歩きたいという気持ちを持っていることも確認できました。

この頃にK岡さんから「みなかみ旗、奥駈道を駈ける！」スローガンをいただきました。先輩方に事のほか賛同、応援いただいていることが大変心強かったです。

みなかみ旗を掲げての縦走は出来ませんでした。80周年バンダナをザックに付けての山行をさせていただきました。縦走者のテンションも上がり辛い時間帯も乗り切ることが出来ました。

出発直前の4月27日にK岡さんから手作り横断幕の写真がLINEに送られてきました。ゴールで掲げるとのこと。参加者の気持ちを一気に盛り上げていただきました。3月30日第二回全体会議、4月18日食料配布と打ち合わせを重ねて出発前日を迎えました。

序盤に寒冷前線の通過が予想され出発すべきかどうか悩みましたが予定通り29日の早朝4:00に吉野柳の渡しで会旗を掲げて記念写真を撮り出発式としました。

序盤と後半の天気をどのように対応するかいきなり課題を突きつけられたスタートでしたがとにかく初日の目的地まで歩くしかありません。ギリギリのところまで雨風をかわすことができ最高のスタートができました。2015年と違って携帯電話を使える範囲が増えていたことも安心材料となりました。例えばLINEを使って2日目の合流についてサポートのM西さんと連絡できたことは非常に安心材料となり落ち着いた気持ちで歩く事につながりました。天気予報の情報を取れたことも助かりました。

今回の山行スケジュールでは天候面、体力面で最大のポイントは4月29日、30日、5月1日でした。その期間に雨風の強いタイミングが夜だけだった事が非常にラッキーでした。大袈裟ですが何かに守られているような気持ちになりました。初日、2日目を少数メンバーで乗り切り3日目メンバーが増えて賑やかになり気持ち新たに後半にスタートしました。

今回、奥駈道縦走して驚いたのは他の縦走者の多さです。2015年には数人にしか会いませんでしたが順峰、逆峰とも多くの人に会いました。中にはわずか2泊で走り切るトレイルランナーや高校一年生の順峰ソロもいました。SNS等で情報が充実しているためでしょうか。とにかくその多さには驚きました。

今回の縦走は単に歩き切るだけではなく奈良山岳会らしく残される塵を確認しながら行くことも目的としました。これは参加者にとってはモチベーションを保つ事にもなり探しながらの山行は楽しいものでした。

いよいよゴールが近づき熊野川が見えて来ました。重かったザックも食料が減り少し軽くなりましたが後半二日間の激下りに痛めた足の小指が痺れてきました。

渡渉ポイントの対岸にはみなかみ旗とK岡さん手作りの横断幕が見えます。2015年とは全く違う充実感の中、渡渉しました。ゴールして迎えてくれた仲間と握手、ハイタッチ。奈良山岳会で良かった！

ほんとに長いようであっという間の七日間でした。参加した方、できなかった方、奈良山岳会のみんなありがとうございました。

奥駈道を歩きながらいろんな話をしました。奈良山岳会 100 周年の際には順峰をやるなんて話も出ました。10年後、20年後に奈良山岳会をつないでいくのに必要な事は山に行くこと。至極、当たり前の事ですがコロナ禍の中、奈良山岳会らしい山行をできてなかったことは会として危ない状況にあったように思います。

今回、Y村さんは最終日のスタート直後にリタイアされました。残念なことではありましたが『山は自己責任』私はそう先輩方に教えていただきました。リタイアすることをご自身で判断された事がすごいと思いました。

私も入会して山行でさまざまな経験をさせていただきました。奈良山岳会としてお互いにサポートすればソロよりも安全に山行ができる。ほんの少しキャパを超える挑戦をする事で全体がレベルアップしていける。そんな流れができれば奈良山岳会はもっともっと面白い山岳会になって 100 周年を迎えられる気がします。

最後になりましたが改めてお礼を言います。

奈良山岳会のみなさん無事に怪我なく終わる事ができました。応援ありがとうございました。

サポートいただいたみなさん、どれだけ心強く感じたことかわかりません。本当にありがとうございました。そして縦走者のみなさん本当におつかれさまでした！やったぜ！

奈良山岳会、万歳！

奈良山岳会 90 周年記念事業大峯奥駈全山縦走の記録

2023 年（令和 5 年）6 月 限定版発行

発行者 奈良山岳会 90 周年事業実行委員会

編集者 宮西節子

宮本由幾

田部公子
